

伝える力

鶴居村教育委員会教育長

村上 明寛

「つるいの子」第四三号の発刊に向けて、児童生徒へご指導いただいた先生方、並びに校務ご多忙の中、編集に当たっていただいた教育研究所の担当の先生方に心から感謝申し上げます。

今年度は、言うまでもなく新型コロナウイルス感染症への対応に明け暮れました。家庭も学校も職場も。先生方には、かつて経験したことのない事態や先の見えない状況の中で、子供たちの安全安心を確保しながら、学びを支えていただいていることに、あらためて感謝いたします。

学校現場では、子供たちに様々な感染症予防対策をお願いしてきました。その代表的な取組はマスクの着用です。子供たちは、登校から下校までほとんどマスクを着用したまま学校生活を送ることとなり、友だちや先生とは、マスク越しのコミュニケーションとならざるを得ない状況が続いています。子供たちは、これまで当たり前のように、言葉と表情の組み合わせでコミュニケーションをとってきました。なのに今は、表情からの情報は半減し、目元だけとなりました。「目は口ほどにものを言う」のは、大人社会ではある程度成り立つけれど、発達段階の子供たちにはまだ難しいと、テレビで流れていました。そう考えると、これからのウイズコロナ社会では、言葉の大切さ、言葉の重さが今まで以上に増すこととなります。ウイズコロナ社会は「言葉」で自分の考えを相手に正確に理解してもらわなくてはならない社会といえます。また、相手の心情や考えも「言葉」で理解できるようになる必要があります。

こうした「言葉で伝える力」と「言葉で読み取る力」を身に着けるためには、言葉の大切さを理解し、適切な言葉を選択する経験を積み上げていくことが肝心と言えます。詩、短歌、俳句、川柳、随想などを創作していく過程は、日常の出来事への興味関心や感性を基に、言葉で伝える力を身に着ける良い機会になるでしょう。コミュニケーション能力の養成にも繋がるものだと思います。そこに「つるいの子」の発刊の意義があるのではないのでしょうか。これからも、鶴居の子供たちが、「つるいの子」を通して「伝える力」を養い、豊かな人間性を備えた「鶴居びと」に成長することを期待しています。